

## 日常生活に密着した蔵

伊藤家を訪れると、蔵が日常生活の一部になっているのを実感する。蔵への出入口は外部でなく、住宅玄関につながる内部にあることからその事実がうかがえる。

伊藤家より照明の設置されていない蔵内部に足を踏み入れるには、懐中電灯が不可欠。その微かな光を頼りに窓を開けると、真っ暗な蔵内部に自然光が差し込み、内部に設置された家具やお面がうっすらと浮かび上がる。

日常生活で頻繁には使用されないが、歴史を感じさせる品々も保管されており、蔵としての本来の機能が今なお充分に発揮されていることに、ある種の安心感を覚える。



壁に掛けられたお面



家具紋

## 蔵の姿も多種多様

先述の蔵ギャラリーと比較すると、壁厚も20cm程度と細身で縦形も2段構成。敢え

て区別するなら、男性的で力強い蔵ギャラリーに対して、伊藤家蔵は簡素で女性的といったイメージだろうか。別添の両者の平面図からはその壁厚の違いが明確であり、立面図からはプロポーションの違いが自ずと伝わってくる。どっしりした蔵ギャラリーと、すっきりした出で立ちの伊藤家蔵、両者を眺めているだけで、その個性の違いが感じられる。

所有者の個性か職人さんのこだわりか、蔵建設に関わった人々の個性がそのまま蔵の個性になっているようで、その背景を想像するだけでも興味深い。



外観

## 蔵の持つ可能性

以上、実測調査をさせて頂いた2つの蔵を紹介したが、その用途や風貌のみならず、まちに対する姿勢もそれぞれ異なっているのがわかる。

長い歴史や記憶が刻み込まれた蔵、それを如何に継承するのか?それは蔵所有者だけの問題ではなく、その蔵を有する地域の課題でもある。地域の風景を特徴づける蔵、どうすればそれを地域の財産にできるのか、まちづくりを考える上でも今後の重要な課題だろう。

# 蔵のおかげで、 多くの出会いに恵まれています。

「蔵」のギャラリー CLASSIC  
オーナー 巽留宏さん

## 「残す」道を開いてくれた 取り壊し寸前の出会い

大正のはじめ、船場の商家の別邸として発展した帝塚山は、私の祖父には憧れの聖地で、そこに居を構えることは、大阪の商人として「一人前の仲間入り」ができたという特別な思いがあったようです。戦後まもなく、私は中学一年生の時に引っ越してきました。

わが家は250坪ほどの敷地でしたが、周りにはもっと大きくて立派なお屋敷がたくさんあるのが、印象的だったのを覚えています。それぞれの家でごく自然に、倉庫（衣装蔵）として使われていた蔵。当時としては、蔵の風景は当たり前でしたので、とりたてて蔵の存在を意識したことはありませんでした。

大学卒業まではここで暮らし、その後はもっぱら転勤族。定年を機に、母が一人で暮らす帝塚山の実家に40年ぶりに戻ってきました。その頃から、「蔵との対話」が始まりました。母屋をマンションに建て替えることになって、蔵まで潰すのがなにかかわいそうになり、「おじいちゃんが苦勞して手に入れた屋敷のよすがとして、せめて

蔵だけでも残せないか」という気持ちになりました。周辺にあった屋敷の多くが、代替わりでマンションに。子供の頃の景観とはずいぶん変わってゆくのを見るにつけ、昔の建物の良さによって気づいた面もありましたね。蔵を改装した建物を見学に行ったりもしたのですが、結局は、維持していく方が大変だということで諦めをつけ、ほぼ潰すことに決まっていたんです。

ところがです、母屋の取り壊しをしている最中に、米国のコロンビア大学准教授で町家の再生を手がける建築家こおりゆみ郡裕美さんに出会い、「なんとか蔵を活かしたら」と言われて。その言葉に背中を押され、一転、残すことに決めました。蔵の取り壊し3日前のことです。

## 蔵がギャラリーに変身して 地域の意識を変える



多くの人が集まる交流の場に